

さん 猿の生き肝

語り手…浜谷 包房さん(御波、昭和3年生まれ)

昔、竜宮の乙姫さんが病気になんまして、あちこちから医者迎えただつど、どげしたててその病気はわからん。あるときに一人の医者が、「こら、どげしたてて治らんけん、わしとすりゃ猿の生き肝飲ますら、治っかもしらん」ちゅう。

「だっか(だれか)、猿の生き肝、取れ行くか」ちゅうことで、「そりゃま、だっぞ、そこにおれせんかいな」ちゅうで(というので)見たところが、ちょうど戸の隙間から海月の足が、こげして(こうして)見えただけに、「おお、ここにおる。ここにおる」言つて海月の足、しゃばった(引っぱった)。ところが、海月が、「なんぞ用かの」てつて、顔出えたもんだけん、「主や(おまえは)、こつから猿を連れて来いな。こげこげで乙姫さんに生き肝飲ませんならのに、主や行きて連れて来い」ちゅうわけで、ほっか(それから)、猿の使いに海月をやつたそう。

その当時、海月は、まだ亀の甲よりりつぱな甲羅もあつたし、骨もけえ、そりゃがつりした骨があつたふうでござんすわな。ところが、「よし、よし」ちゅうで、ある浜辺へ行きて、こら、松の木が生えちよつただけん、見たとこめが、なんと、その上で猿が、んまげに(うまげ=楽しそうに)遊んでおつたけん、

「こいつ、どげぞして、だまくらげて連れて行かなならんがー」思つて、「ようい、猿さん、猿さん、おまえらちや海の底の竜宮城ちゅうとこ見たことあつかい」てつて言つたところめが、猿が、「わしらち岡の上におつもんだけん、ようそげなとこあらあわな(よくそのような所があるはずないわい)」

「なんと、そんなら、おれが連れて行きて見せてござあか」「そつが本当なら、ひとつ頼んわい」ちゅうた。

「おお、そんなら、ずつど(たいそう)身体の大けなりつぱな者から順々だど」ちゅうで、ずつど大きな猿を身体に乗せて、そつから、途中まで来て、やめらいいことに馬鹿がけ、ちよつとけ、口をすべらしてしまつて、「今に竜宮城へ行きたてや、主や、ま、生き肝取られて、殺されつたわい」。

さあ、そろ(それを)聞いた猿はけ、たまげてしまつて、どげぞして、こいつをだまくらげて、岡へもどらなならん。「やれな、なあせ(どうして)、主やそろ早急に言つてござんだ。生き肝ちゅうものはな、いつもいつも身体にあれせんた。今日みたいな天気の良い日にや、虫干しせにや、あら、虫のつくもんで、今、みなで遊んでおつた松の木に広げて干えてあつた。そつで、鳶やなんやに取られら悪つたけん、そつであげして、みなで木に登つて番しちよつとこだだわい」

「そげだだか。そらま、ちいと分けてごすわけにはいかんか」
「おお、そりゃ、なんぼでも分けてやつどこだねえ、元んとけ(ところへ)行きさいすら、なんぼでもあつたけん、分けてやつたわい」
「やれ、そげだだか」ちゅうでけ、元んとけ連れて行きたらげえ、松の木の上、登つてからに、「ここ食べー食べー」言つて、尻(しつべ)エオケ、パタパタ叩たちゅうわな。

そつで本当は、猿の尻が光つて(赤くなつて)おんのは、そんなとき、尻叩たけんちゅうわな。

そつでけ、今度、海月のやつにはしかたねえだけん、いんで、け、「こげこげで、生き肝取つて来るてて言うもんだけん、浜へ帰したとこがけ、ここ食べ、ここ食べ、言つて、尻を叩て、ごしゃしません(くれやしません)」「こな馬鹿よ。主やだまくらがされたわい」言つて、「罰だ」「罰だ」言つてけ、みなで寄つてたかつてけ、骨、抜かれた。そつから、海月ちゅうもんは、骨なしになつたふうでござんすわな。(昭和51年5月29日収録)

■聞き手…萩坂昇、大島廣志、池田百合香、浜谷深希、酒井董美

隠岐島前高校郷土部収録 海士町の民話から(15)

■再話・解説
酒井董美

(山陰民俗学会会長、
元隠岐島前高校郷土部顧問)



■絵：福本隆男(崎出身、三郷市在住イラストレーター)

【解説】 関 敬吾『日本昔話大成』でこの話の戸籍を調べると、「動物昔話」の「八 動物社会」の中の「猿の生肝」として登録されているのに当てはまる。ここでは浜谷さんの鮮やかな語りを味わっていただきたい。